
本の虫～5月の図書館～

姫林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本の虫～5月の図書館～

【Zマーク】

Z5238C

【作者名】

姫林檎

【あらすじ】

本の虫～春の図書館～の続編。『あの人』の本を読み終え、図書室へ向かうと・・・。

(前書き)

春の図書館、5円の図書館 次は・・・6円の図書館ですね。やううと思います。

ただし、不評の場合にはやめておいたいと思ひの少し様子を貰ます。

『だつてそれ、俺が書いたんだもん。』

あの人の中でも何度も木霊していた。

あの人の中でも何度も木霊していた。

『あの人』といつてるのはもちろん、名前を知らないから。

聞き忘れてしまったから。

先月 高校生になつた私は、入学式の数日後図書室へ向かつた。

『本が友達』といった感じな中学校生活を終えた私は、まだ本にしがみついていた。

『感想 聞かせてね』

あとの人の本の言葉は あたたかくて 優しくて

なぜかオレンジのにおいがする気がした。

物語は主人公の男の子の一人称ですすむ。

中学生になつた男の子が6年ぶりに再会した初恋の相手は幼稚園児の頃とは想像できないほど冷たい子になつていた。

彼女はいつも冷たい氷の眼差しですべてを見ていた。

冷たい言葉を発する彼女は主人公の男の子も冷たい言葉で拒否した。それでも主人公が彼女から離れようとしたのは、彼女のあたたかい眼差しを見てしまったせいだった。

そこまで理解した時、私は題名の意味を知った。

5月になつてすぐ、私は本を返しに図書室へ向かつた。読むのに1ヶ月もかけたのは初めてだった。

いや、本当は3日ほどで読んだのに、何度も読み直して1ヶ月かかってしまった。

図書室を開けると、オレンジのにおいはしなかつた。

あの人はいなかつた。

本を返却し、図書室を出ようとドアを開けた瞬間

「・・・オレンジ」

つぶやいて顔をあげると、曲がり角からの人人が現れた。

タイミングがいいのか悪いのか。

私は驚いて、低い段差で足をすべりてしまった。

「ドサッ！」

しりもちをついた音で気がついたのか、あの人は私を見て笑った。

「あ・・・あの・・・」

「大丈夫？」

あの人はそういうと私のそばまで歩いてきて、手をかすわけでもなく眺めて笑っていた。

「あの、本読みました！！」

私は起きる」となく、報告をしてしまった。

あの人は、急にしゃがみこむとおなかを抱えて笑い出した。

「え？あの・・・」

「君、おもしろいね。まずは起きれば？汚いよ」

そういわれてようやく私は勢いよく起き上がった。

「名前、聞いてもいいですか！！」

ずっと 1ヶ月間ずっとと言いたくてしようがなかつた言葉を囁つた。

「え？ああ、そつか。2年生の近藤敦（コンドウアツシ）です。」

「うん。あっくんって呼んで」

近藤君はくすりと笑つた。

気がつくと私は近藤君と一緒に図書室にいた。

図書室の机に向き合って座る。

「あの、どうして図書室に近藤君の本があるんですか?」

「近藤君って呼ぶんだ。」

近藤君はまたくすりと笑つた。

頬杖を二く近藤君は前よりはこわくなかった

必死に言葉を探す私に対し、近藤君は頬杖をつくぐらい余裕だつた。

「俺ね、図書部の部員なんだ。それで、入部テストってのがあってさ。それが本を作ることだったんだ。表紙が普通の画用紙だったでしょ？」

そういうえば、と私は思い出した。

あんまり表紙とか気にしていなかつたけど、確かに表紙は画用紙で、手書きだつた。

ただ、中は普通に印刷の活字だったからあまり気にならなかつたのかもしない。

「あ、ちなみに普段は野球部の部員ね。かけもちってやつ。」

私は眉間にしわを寄せた。

野球部のかけもちが図書部？

私の知つている限りでそんな人はいなかつた。

野球部の人気が図書部に入りたいなんて思つものだろうか？

まあ、それは私の勝手な思い込みかもしだいけど。

その後、私と近藤君は昼休憩が終わるまでお互いのことを話し合つた。

放課後も来る約束をして。

放課後も私達2人は最終下校時間まで語り合つた。

お互いについて 先生について 学校について 本について 作家について。

その時間のすべての話が楽しくて、心地よくて。

あの本の言葉達と同じ 体温を持った言葉達だった。

その後、近藤君と別々で帰った私は、なんだか別人な気分で自分の部屋にいた。

あんなに人と長いこと話したのは何年ぶりだろう?

1年、2年・・・3年ぐらい? ひょっとしたらもうひとつ?

私はその日、寝るまでずっと自分がふわふわ宙に浮いてるよつた気がしてた。

頭の中を近藤君が支配していた。

本を読んだ後とはまた違つ 心地よい余韻だった。

明日近藤君に会つたら何を話そう

明日近藤君に会つたらどんな顔をすればいい?

明日近藤君に会つたら・・・

だけどそんな考え、近藤君には不要だった。

次の日、朝の会が終わると理科室への移動教室だった。

移動の途中、2年生達の朝会とぶつかつたらしく、狭い廊下に人が多かった。

不意に、誰かが私の肩に手を置いてそのまま通り過ぎた。

驚いて振り向くと、そこには私のほうを見て笑う近藤君がいた。

手を振るつとしたけど、近藤君はすでに人ごみに紛れていた。

昼休憩、私はお弁当を食べ終わると走つて図書室へ向かった。

お弁当の直後に走るなんておなかは苦しいけど、歩いてるなんでも
どかしかつた。

ドアを開けると、図書室はやつぱりオレンジの香りでいっぱいだつ
た。

近藤君は机に座つて本を読んでいて、私に気がつくと本を閉じて手
をふつた。

向かい側を勧められて、慌ててそこに座る。

「朝、気づいてくれた？」

「は、はい。気づきました」

私が言つと、近藤君は笑つた。

それから少しの間沈黙が続いた。

沈黙は、私にとつて息苦しくて私を焦らせるものだった。

だけど、近藤君の沈黙は違つた。

静かな時間が、逆に心地よかつた。

「近藤君の本は、もうないんですか？」

「うん。 あれだけだよ」

「 もう…書かないんですね？」

近藤君は『ハーン』と短く唸つた。

「書きたい」とがなんんだ。だから書きたくない」

「 もう…ですか…」

「 読みたい？」

「はいー。」

即答するとい、近藤君は噴出した。

口元をおさえてくすぐり笑ひと『うん わのひがね』と答えてくれた。

「近藤君の本、凄く素敵だつた。」

「 もう…」

「うん。 近藤君がつなげると、『葉つてあんなに素敵になるんだね』

そう言って笑ひ、近藤君は少し顔し赤くして笑った。

桜も散つた 暖かい5月のことでした。

(後書き)

感想や意見、待っています。是非お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5238c/>

本の虫～5月の図書館～

2010年11月5日07時31分発行